

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03103

研究課題名（和文）戦後日本の地域医療・福祉に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical research on community healthcare and welfare in postwar Japan

研究代表者

鬼嶋 淳（KIJIMA, Atsushi）

専修大学・文学部・教授

研究者番号：60409612

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦後の地域医療・福祉を検討する歴史的前提として1930年代の岩手県における農村医療と、戦後の埼玉県大井医院による医療運動を検討し、主に2点の成果を得た。第1に、医療関係者らは大凶作下の農村に一方的に近代的医療を導入したわけではなく、農村の現実に向き合いながら保健医療活動を行った。医療の成果を実感した農民は、総力戦の時代、国家的要請のなかで医療を受容した。第2に、敗戦後の劣悪な医療環境下で診療活動を通じて支持を集めた大井医院は、高度経済成長期に、診療のみならず地域政治の場で地域医療・福祉を向上させる運動を展開した。1970年代初頭には保守系町長と共同で地域福祉重視の地域づくりを進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化と新自由主義が進むなかで格差が広がり、「貧困」問題が改めて浮上する現在、歴史学では、「生きること」をテーマにした研究に注目が集まっている。特に人々が生きていくために取り結ぶ社会的諸関係に視点を当てたとき、「地域」への視座が重要となる。本研究は、こうした社会動向、学術的動向のなかで、「地域」という場のもつ複雑な政治的関係に注目して、「生きること」を支える地域医療・福祉への人々の取り組みを明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：To examine regional healthcare and welfare in post-war, we examined rural medical care in Iwate pref. in 1930s as historical premises and the medical service movement by Ooi Clinic in Saitama Pref. after the war. Obtained two main results as follows.
1. Medical personnel did not unilaterally introduce modern medical care to farming villages under the Tohoku Famine. They conducted health and medical activities with facing the realities of the villages. The farmers who witnessed the results of medical care, in addition to national policy, accepted medical care.
2. Ooi clinic which gained support through its medical activities under the poor medical environment after the defeat in the war, developed a movement to improve local medical care and welfare not only in medical treatment but also in local politics during the high economic growth. In the early 1970s, the supporters and the conservative mayor jointly promoted regional development that emphasized community welfare.

研究分野：日本近現代史

キーワード：地域史 医療運動 地域医療 高度経済成長 農村医療 地域政治

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

本研究には3つの学術的背景がある。

第1は、1950年代、高度経済成長期研究への関心の高まりである。成田龍一が指摘するように、50年代は、多くの人びとによる主体的な動きがみられ、様々な可能性を秘めていた時代として注目が集まっている(『近現代日本史と歴史学』中公新書、2012)。また、「高度経済成長への道」は確定していたわけではなく、占領—復興—高度経済成長といった単線的な戦後日本社会像とは異なる「多様」で「複雑」な戦後像が、改めて問い直されている(グラック、キャロル『歴史で考える』岩波書店、2007)。

こうした研究動向に基づいて、本研究は、研究代表者がこれまで進めてきた、戦時～1970年代に、地域のあり方をめぐって展開した地域社会運動研究を発展させて、都市近郊地域に加えて、新しく農村地域の地域医療・福祉を基軸とする地域構想を実証的に検証することで、「高度経済成長への道」とは異なった戦後日本社会像を展望するものである。

第2に、「生存」に注目した歴史研究への関心の高まりと広がりがある。現在、生活を維持する「生存システム」の作られ方に着目した研究が、日本中近世史から近現代史まで広い時代で検討されている(例えば、長谷川裕子、倉地克直、大門正克など)。人びとが生きていくために取り結ぶ社会的諸関係に視点を当てたとき、地域への視座が重要となる(例えば、大門正克ほか『「生存」の東北史』大月書店、2013)。また高岡裕之は、戦時・戦後東北農村の医療運動研究を踏まえて、戦後日本の医療・福祉制度構想について、地域の先導性が強かったと指摘する(「日本近現代史研究の現在」『歴史評論』693、2008)。ヨーロッパ史の分野では「福祉の複合体」論(高田実)など、人びとが様々な関係性のなかで生活維持をはかっていたことが明らかにされ、「福祉社会」論の日欧比較も行われている。現在、人びとにとっての医療・福祉を考える際、「地域」が分析対象の焦点といえる。

本研究は、「地域」という場のもつ複雑な政治的関係に注目して、「生存」を支える医療・福祉への人びとの取り組みについて検証する。

第3は、戦後農村社会研究の新しい潮流である。近年、「大日本帝国」という空間、在日朝鮮人をふくめた担い手の移動、生活改良普及事業といった点に着目した新しい研究が進んだ(例えば、日本農業史学会2015年シンポジウム「農家・農村の戦後と高度成長を穿つ 移動と女性と高齢者」)。そのなかで、岩島史は「農村女性政策」、安岡健一は高度経済成長期の農村の高齢者問題をテーマに論じている。

本研究は、研究代表者が進めてきた1950年代農村生活と女性、干拓地社会形成、農村医療運動といった研究に加えて、地域医療・福祉を対象にすることで、農村社会研究と接続することになる。

(2) 発展させる内容

以上のような学術的背景に基づいて、本研究では、これまで研究で進めてきた都市近郊農村の事例について、高度経済成長期までをふくめて地域での医療・福祉の担い手の構想・取り組みについて明らかにする。高度経済成長期に「過疎化」に悩む農村地域を新しく検討する。戦後の人々による地域医療・福祉問題への取り組みを総合的に検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後の地域社会において、人びとは医療・福祉問題にどのように取り組み、地域のあり方を構想したのかを、社会変動との関連に留意しつつ実証的に検討することである。

これまで研究代表者が進めてきた、首都圏周辺地域を事例とした医療運動と地域形成に関する研究成果を発展させ、「都市化」が急速に進んだ都市近郊地域だけでなく、「過疎化」が進んでいく農村地域を新たに分析対象地として設定し、地域において人びとが生きていくために結んだ社会的諸関係を明らかにする。とくに戦後日本社会を大きく変貌させた高度経済成長期に焦点をあてることで、地域間の差異を明確にして、「多様な」戦後日本社会像を展望したい。

3. 研究の方法

(1) 分析対象地域について

本研究では、都市近郊農村地域と農村地域の2地域を分析対象地域に設定した。前者は、これまで研究代表者が研究を進めてきた埼玉県大井地域とした。基本史料となる「大井医院・大島慶一郎関係資料」の整理を終えたため、全面的に利用することで、従来研究の蓄積が薄かった高度経済成長期を中心に地域医療・福祉をめぐる人々の動きを明らかにした。後者は、新しく対象地域を設定する必要があった。計画通りに研究が進行しないときのために、常に2つの課題を準

備して研究を進めた。

(2) 分析対象地域との関係

埼玉県大井地域については、これまで「大井医院・大島慶一郎関係資料」を所蔵する資料館と共同で史料整理・調査を実施していたこと、講演会などを実施して研究成果を広めていたことなどから、聞き取り調査の実施を含めて地域との協力関係を構築した。

新たに設定する予定であった農村地域については、すでに対象候補地で調査を行い、資料目録の収集などを進め準備を整えた。

4. 研究成果

研究期間の後半、まとめの段階に「コロナ禍」となったため、調査を実施できず、計画を変更せざるを得なかった。そうしたなかでも、事前に設定した第1課題については、十分時間をかけて研究成果を単著としてまとめることができた（鬼嶋淳『戦後日本の地域形成と社会運動 生活・医療・政治』日本経済評論社、2019）。同書は、約10の研究雑誌で書評として取りあげられた。また、研究代表者がこれまで獲得した科学研究費補助金で整理を進めてきた「大井医院・大島慶一郎関係資料」の目録を完成させた。

第2の課題に設定していた農村地域の分析については、新しい分析対象地の調査を深めることが不可能となり、研究成果としてまとめることを断念せざるを得なかった。しかし、従来調査して史料を収集してきた東北大凶作下の農村医療について、研究期間延長の時期も利用して研究を進めて、論文として研究成果をまとめることができた（鬼嶋淳「東北大凶作を生き延びる」大門正克・長谷川貴彦編著『「生きること」の問い方 歴史の現場から』日本経済評論社、2022）。同書も数誌で書評として取りあげられ、また研究会で合評会が開催されるなど、関心を持たれている。

当初の計画では、本研究の全体的課題は、戦後日本における地域医療・福祉問題であったが、急遽、テーマを拡大し、戦後日本の地域医療・福祉を検討する歴史的前提として1930年代の農村医療について検討することができた。研究課題を広げたことによって、戦後に限定せず、近現代日本の地域医療・福祉問題を検討することが可能となり、近世から近代移行期の「医療環境」をテーマとした研究会でコメンテーターを務めるなど、視座を広げることができた。

また、研究期間内のもう一つの大きな変化として、基本史料と位置づけてきた「大井医院・大島慶一郎関係資料」の所蔵・保管について再検討が必要な事案が発生したことである。地域に残る現代史資料の保存・活用をめぐるシンポジウムで報告をした。今後、こうした地域に残る現代史資料の保存・活用をめぐる問題は、重要な課題となると思われる。

現在、「コロナ禍」で調査が思うように実施できず研究成果をまとめることが叶わなかった第2の課題である戦後の農村地域の地域医療・福祉問題について取り組んでいるところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 鬼嶋淳 | 4. 巻 218号 |
| 2. 論文標題 東北大凶作を生き延びる | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 評論 | 6. 最初と最後の頁 16-17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 鬼嶋淳 | 4. 巻 869号 |
| 2. 論文標題 書評池田宏樹著『戦後復興と地域社会』 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 日本歴史 | 6. 最初と最後の頁 107～109 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 鬼嶋淳 | 4. 巻 231 |
| 2. 論文標題 戦後地域における「デモクラシー」研究の課題と方法 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 部落問題研究 | 6. 最初と最後の頁 26-31 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 鬼嶋淳 | 4. 巻 224 |
| 2. 論文標題 戦後日本の地域医療・福祉をめぐる運動 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 部落問題研究 | 6. 最初と最後の頁 30-60 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 鬼嶋淳 |
| 2. 発表標題 海原亮報告・廣川和花報告へのコメント |
| 3. 学会等名 近現代史研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 大門正克・長谷川貴彦編 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 日本経済評論社 | 5. 総ページ数 343 |
| 3. 書名 「生きること」の問い方（担当箇所：鬼嶋淳「東北大凶作を生き延びる」） | |

| | |
|-------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 鬼嶋 淳 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 日本経済評論社 | 5. 総ページ数 288 |
| 3. 書名 戦後日本の地域形成と社会運動 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|